

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	33 / 2013 / 17 - 22 (再編集版)
タイトル	八甲田・十和田・三内丸山を世界遺産に
著 者 名	小山内孝

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

八甲田・十和田・三内丸山を世界遺産に

顧問 小山内孝

はじめに

2013年6月に、富士山が世界遺産に登録され、日本の世界遺産は文化遺産13件、自然遺産4件)となったと報道され、日本中が沸き立っています。

私は、日本列島そのものが世界遺産であると思っています。それは、相観(バイオーム)〈植物生態学では、主としてある地域の植物群落の外観を意味する〉から見て、日本列島が南北に長く、最終氷期から間氷期、縄文海進にかけて大陸から切り離され、南は亜熱帯多雨林から、照葉樹林、冷温帯落葉広葉樹林(夏緑樹林)、針葉樹林まで見られる地域になったからです。こういう国は世界にないのです。ある歴史学者などは、この日本を「花彩列島」と言っています。



写真1 青森市から見た冬の八甲田山

この稿では、やぶなべ会報31号の「青森県の自然史—氷期から縄文への旅」の続きとして、冷温帯落葉広葉樹林である、八甲田、十和田の植生の多様さから来る美しさ、素晴らしさを描きます。一度は、八甲田、十和田の大部分が用材として切り倒されたブナ林が壮大に回復したことは世界遺産に値すると考えています。青森県では、三内丸山の遺跡と共に、世界

遺産に申請したらどうかと思っています。同じ冷温帯紅葉樹林である美しいドイツの自然と比較してみようという試みです。時間の関係で、主として写真で見て頂こうと思います。

又、ドイツの自然回復にかけた努力というものにも学びたいと思います。

1. 日本列島の誕生

日本列島は、約2000万年前、ユーラシア大陸の東縁部が割れ始め、割れが拡大し、海が出来、約1500万年前、日本海の原型が出来上がってきたのです。

現在の日本列島は、四つのプレートがひしめき合っています。太平洋プレートは東から、北アメリカプレートとフィリピン海プレートは南東から、ユーラシアプレートの下に沈み込んでいます。

これらの沈み込んでいる太平洋側に海溝があり、日本列島の中央部には火山が南から北へ連なっています。

その結果、日本列島は、火山が連なり、地震の多発する列島です。そして温泉、地下水の豊かな国です。又、人類の時代のあけぼの、約170万年前から時代は、新生代・第四紀・更新世の時代は、通して見ると、現在より寒い、氷河の拡大する時代であったのです。それが次に述べる様に、間氷期の、約1万年前から気候の暖かい時代に入り、縄文海進の時を迎え、多雨・多雪の日本列島が誕生したの

です。

2. 日本列島の自然

— 多雨・多雪の日本列島の誕生 —

更新世の時代は、先述したように全体を通して見ると寒い時代ですが、寒い時代の氷期と、暖かい時代の間氷期を約10万年毎に繰り返してきたのです。間氷期には、氷が溶け、海水が増え、海水が陸へ向かって侵入し、海進が進み、氷期には逆に、陸に氷河が増え、海水面が低下し海退の現象が起こったのです。

生物は、このような気候変動に対し、南に移動したり、北に移動したりし、適応できなければ絶滅したのです。

この頃の日本は、現在に最も近い列島となったのですが、最終氷期(ウルム氷期)の最後の時期は、最も気温が低下し、海面は現在より120m近く低下し、津軽海峡は、陸橋が形成されたのです。動・植物は移動でき、北海道と本州には、共通した動・植物が多かったと考えられます。

その後、完新世(約1万年前)に入り、気候が温暖化が更に進むと共に、対馬暖流が、日本海に流入し、北上、津軽海峡を通り、太平洋に流入していったのです。この流入は、日本海の生物相の多様化を促し、日本列島の多雨、多雪を生み、モンスーン、アジア気候の大きな影響を受けました。東西・南北の地域差のある日本列島を生み、降水量分布や多雪などの著しい季節的地域差の基となっています。このことが、日本列島の生物相の多様化も生み出しています。日本列島の美しさは、相観の多様性からくるものです。

3. ドイツの緑一色の美しい自然

— それは州政府と市民の手入れによるもの —

(1)ドイツの自然破壊

今回、昨年(2012.6.26～7.1)訪れたミュンヘンと「黒い森」(シュバルツバルト)について、ツアーのドイツ案内者であり、通訳者の茉莉・トーフルさん(ドイツ在住)の話から報告致します。

フュッセン地方の風景とノイシュヴァンシュタイン城付近のトウヒ林(針葉樹林)や、冷温帯落葉広葉樹林と、針混混交林を中心に、その美しさをまず、写真でみていただくことにします。(写真2～7)

言うまでもなく、ドイツは第二次世界大戦とその後の高度経済成長期の1980年代に、酸性雨や大気汚染のため、モミやトウヒの二次林は、枯死、衰弱し、大きな影響を受けています。

又、現在も東欧の汚染した大気、窒素酸化物による酸性雨でも、ドイツトウヒの森は痛めつけられているということです。

ドイツの「黒い森」は、もちろん原生林などではなく、ドイツトウヒやモミも、連邦政府によって植林された森です。(ドイツでは州の独立性・自治性が強い。)

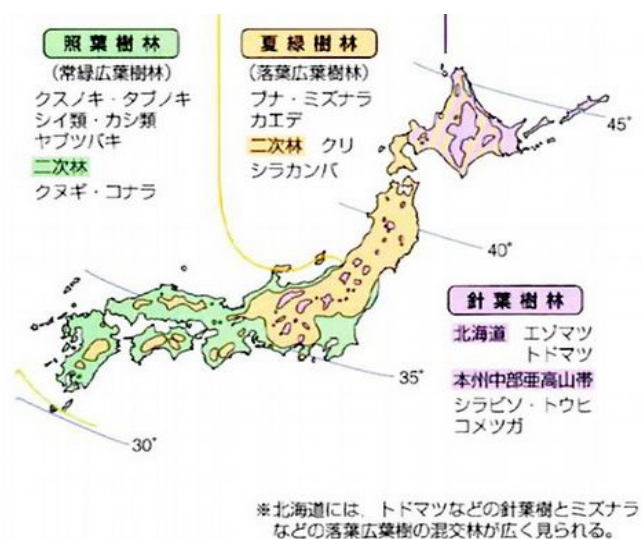


図1 日本列島は北から針葉樹林、夏緑樹林、照葉樹林に大別される。



写真2 農家と牧草地(芝生のように見える)



写真3 フュッセン地方フォルゲン湖の眺望



写真4 ノイシュヴァンシュタイン城と森



写真5 ドイツウヒの人工林



写真6 ドナウ川に合流するミュンヘン近郊を流れるイザール川。林や水草が多い



写真7 ヨーロッパモミジ

市民は価格にだけとられず、国内で植林し育った木を使い、家の建築や家具、紙製品等も使うように心掛けているということです。

(2)ドイツの街と郊外の自然

ドイツの街の郊外には、広い平野に奇妙な丘と森があります。これが、ゴミによる森であり、公園なのです。フライブルグやミュンヘンでは、ゴミは焼却処理をしていないのです。多分、大気汚染を懸念しているものだと思います。郊外では道路工事をしている所もありますが、広い道路の両側に林が続いている所、低木林になっているところ、全てが緑になっています。それは、「代償措置法」という法律で、緑化が義務づけられているからです。

それから、帰化植物や帰化動物の持ち込みは禁じられているのは当然として、入り込んでいる帰化

植物や動物は、自治体により撤去されているのです。

日本の様に、アメリカザリガニやブラックバスなど混入することはないのです。又、植物にしても、カモガヤ、イタチハギなど、日本では公共道路工事の土留めに使われていますが、これは、ドイツでは犯罪になるのです。

4. 八甲田・十和田の森林の美しさ

私は、八甲田山の生態系という場合、青森市の郊外、里山や水田も入れて考えたいと思っています。又、美しさの感じ方は人により異なるのですが、私には、生物、特に植生の多様性から来る相観の美しさと地域のもたらす景観から感じているものだと思っています。その点で、八甲田山の生態系は、極めて多様です。冷温帯落葉樹林、ブナを中心としてのミズナラ・カエデの森林の美しさは感動的なものです。



写真8 石倉山から望む北八甲田

又、モミ属のアオモリドマツの冬の樹氷です。過冷却水が一気にアオモリドマツにぶつかり、樹氷となるのは、世界でもあまり見られない現象です。八甲田山、十和田湖、三内丸山は、すぐにでも世界遺産となるべきものです。

八甲田山の景観の素晴らしさ

明治30年代から、ブナやミズナラを薪炭として切り倒し、八甲田の赤沼の下あたりまで広く切り倒したり、又、八甲田の中腹は、放牧地として切りひらかれ、広く草原に近くなったのです。

それが、戦後に薪炭が石炭・石油と代わって切る必要がなくなり、ブナの二次林が広く復活し、自動車道を覆う緑のトンネル状になったのです。このような自然の緑の回復は世界でもないでしょう。

それでは、八甲田の植物的自然について見ていきましょう。

1) 十和田湖を源とする、奥入瀬溪谷の美しさ、冷温帯林の溪畔林が生育。トチノキ、サワグルミ、カツラ、ハンノキ、シロヤナギ、ブナ、ナナカマド等。

転石上にムラサキヤシオ、ヤナギ類。早春には、ニリンソウ、カタクリ、キクザキイチリンソウ。



写真9 (左)
奥入瀬溪流
写真10 (右)
ブナ林





写真11(左)
ムラサキヤシオ
ツツジ
写真12(右)
ニリンソウ

2) 雪田植物 — 八甲田の池塘 — は「神の田」

ヒナザクラ、アオノツガザクラ、チングルマ、ウサギギク、ハクサンボウフウ等。

池塘 → ミズゴケ類に、ミツガシワ、ツルコケモモ、ワタスゲ、チングルマ、モウセンゴケ、キンコウカ、ヌマガヤ、ホロムイソウ 等。



写真13(左)
キンコウカ
写真14(右)
ワタスゲ



写真15(左)
チングルマ
写真16(右)
ヒナザクラ

3) 針葉樹と広葉樹の混交林

アオモリトドマツ、ダケガンバ、ミヤマハンノキ、ミズナラ、ハウチワカエデ、ミネカエデ等。

早春の「はるもみじ」、秋の「紅葉」の素晴らしさ。

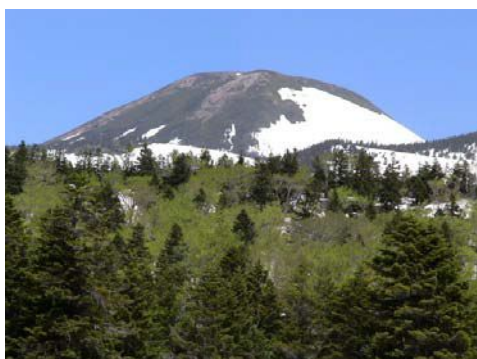


写真17(左)
ダケカンバ
写真18(右)
アオモリトド
マツ

写真19 (左)
ミヤマハンノキ
写真20 (右)
コメツガ



4) 高山植物

イワヒゲ、イワギキョウ、イワブクロ、ムシトリスミレ、ミヤマオダマキ等。

写真21 (左)
高山帯
写真22 (右)
イワギキョウ



写真23 (左)
ミヤマオダマキ
写真24 (右)
ムシトリスミレ



最後に、ドイツには、総合的な環境政策があり、法律による産業、企業、開発には厳しい規制があります。自然そのものの街並みなど、美しさを創造する観光政策があり、世界からの観光客でミュンヘンは賑わっていました。

日本では、総合的な環境政策も、観光政策のなさをつくづく感じました。帰化植物、帰化動物の野放し、減反政策による水田の放棄と生き物のいない水田、海岸や河川、あらゆる道路のコンクリート化、3.11復興のための海岸のコンクリート化370km、産業廃棄物、一般廃棄物処分方法への環境から見ての政策のなさ。

環境面から見ると、日本は生物と共生関係を目指さない異常な国だと痛感しました。しかし、青森県民や国民が、その異常さに気付けば、すぐにでも日本国が世界遺産となるでしょう。地域の自然の豊かさを知らせる「道の駅」なども沢山できています。

参考文献

「新青森市史 別編4 自然」、青森市、2009年

「フォトサイエンス 生物図録」、鈴木孝仁監修、数研出版、2011年